

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520424

研究課題名(和文) メタファー発話の解釈プロセスに関する認知語用論的研究

研究課題名(英文) A Cognitive-Pragmatic Approach to the Interpretation Process of Metaphorical Utterances

研究代表者 吉村 あき子 (YOSHIMURA AKIKO)
奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：40252556

研究成果の概要(和文)：様々なレベルの類似性に基づくメタファー発話の解釈プロセスには、ソースをプロトタイプとし、ターゲットをその要素に含むように最小労力で抽象化された上位スキーマの構築が関わっていること、ストーリーレベルのメタファー発話は、制約を課せられた帰納的推論によって導出される推意を伝達することを明らかにし、演繹規則による2種の推意のみを主張する、現時点で最も有望視される発話解釈理論「関連性理論」を修正発展させた。

研究成果の概要(英文)：Metaphor is based on the cognition of various levels of similarity. This research revealed two points: 1) that metaphorical-utterance interpretations involve the addressee's construction, with her/his minimal efforts, of an abstracted schema which is the result of an elaboration to include its source as a prototype and its target as a (peripheral) member, and 2) that metaphorical utterances based on the story-level similarity communicate a new type of implicatures drawn by relevance-constrained inductive inference rules. These results lead to the radical modification and advancement of the most promising cognitive pragmatic theory, "Relevance Theory".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：言語学・英語学(意味論・語用論)

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：メタファー、アナロジー、類似性のレベル、関連性の原則、発話処理プロセス

1. 研究開始当初の背景

Lakoff and Johnson (1980)によって、メタファーがことばの綾(修辞)ではなく認識の綾であること、言い換えると、メタファーがことばの飾りではなく我々の認識の基礎になる現象であることが指摘されて以来四半世紀にわたって、認知科学、認知心理学、認知言語学及び認知語用論の領域で、メタファー研究は大きく発展してきた。その研究のほとん

どが、Juliet is the sun.のような対象(個体)レベルの類似性に基づくメタファーの研究で、命題レベルやストーリーレベルの類似性に基づくメタファーを扱った言語学的研究は非常に少ない。さらに、コミュニケーションに見られるメタファー発話を人がどのように解釈して話者の意図した意味にたどり着くかという発話解釈過程という視点からメタファーを扱った研究も極めて少なく、

Carston (2002)によるアドホック概念による表意レベルの分析も、ストーリーレベルの類似性に基づくメタファーヘストレートには適用できないように思われる。コミュニケーションにおける発話解釈理論である関連性理論は、意図明示的刺激のあらゆるタイプの解釈過程を説明することを意図した有望な理論である。しかしこの理論も、対象レベルの類似性に基づくメタファー解釈プロセスを説明することはできるが、語彙的手がかりのない命題レベルやストーリーレベルの類似性に基づくメタファーのオンライン解釈プロセスを説明できない。また対象レベル、命題レベル、ストーリーレベルのメタファーの解釈過程に共通に生じる抽象化という普遍的特性を的確に関連性理論が捉えられないように思われ、多様なレベルの類似性に基づくメタファー発話解釈を統一的に扱える理論が見当たらない状況にある。

2. 研究の目的

本研究は、様々なレベルの類似性に基づくメタファー発話の解釈メカニズムの解明を具体的目標にし、現在最も包括的なコミュニケーション理論と見なせる Sperber and Wilson (1986, 1995²)が提案する関連性理論を修正発展させることを通して、包括的な発話解釈理論の構築を目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は、コミュニケーションに見られるメタファー発話の解釈過程を分析する枠組みとして、「関連性理論」(Sperber and Wilson 1986, 1995²)を採用し、その認知語用論的発話解釈プロセスの分析方法を基本的に踏襲する。関連性理論の研究対象は、相手に何かを伝えようとする意図をはっきり示した「意図明示的刺激」で、刺激の受け手が伝達者の意図を理解するプロセスを解明しようとする理論である。

Grice(1967)の William James Lecture 以降、発話が伝達する意味には、明示の意味と非明示の意味の2種類があることは広く認められている。関連性理論は、それらをそれぞれ表意と推意と呼び、表意は発話の論理形式を拡大発展させたもの、推意は、発話によって伝達される表意以外の意味と定義する。

関連性理論内の発展を見ると、表意形成プロセスは洗練され、理論成立当初には見られなかったアドホック概念形成という語用論的手段を採用したことによって、対象レベルの類似性に基づくメタファー(対象概念の抽象化(カテゴリー化))を表意レベルで扱えるようになった。

一方、推意形成のプロセスに関する発展は見るべきものがないように思われる。推意を引き出すオンラインの語用論的推論過程にお

いては、演繹規則の削除規則が関わる、という記述以上のものが見られない。これだけでは、命題レベル及びストーリーレベルの類似性に基づくメタファーにおいて必ず生じている抽象化が扱えない。理論的道具が決定的に足りないのである。

そこで、発話解釈過程のレベルを捨象しメタファー一般を取り扱う認知科学や心理学、認知言語学における研究に基づき、メタファー現象がいったいどのようなものだと規定されるのが妥当であるのか、その普遍的特性を確認する。その上で、発話解釈という視点から、各類似性のレベルに基づくメタファー発話の解釈過程をシミュレーションし、関連性理論がその特性を捕らえられるかどうか、捉えられないとすれば何が問題なのかを明確にして解決の方向を定める。次に、命題レベル以上の類似性に基づくメタファー解釈過程に関わる抽象化によって派生される非明示的意味が引き出されるプロセスを明らかにする。そして、抽象化による推意派過程を洗練し、抽象化に関わる帰納的推論がオンライン解釈過程にのった場合に予想される問題、その解決策を検討し、他の現象との整合性及び理論内での整合性を保つように、関連性理論内に位置づけて、発話解釈理論を修正発展させる。

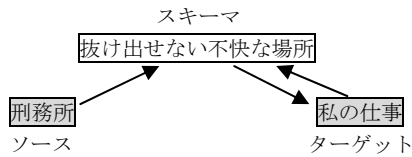
4. 研究成果

(1) 下記(i)(ii)(iii)に具体例を挙げたように、メタファーには、順に対象レベル、命題レベル、ストーリーレベルの類似性に基づくメタファー発話があるが、その解釈プロセスについて、前理論的視点からその共通点と相違点を明確にした。

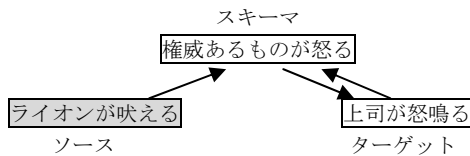
共通点は、a)各例の下に図示したように、当該のメタファー発話(に含まれる要素)をソースとして抽象化を行い、それがプロトタイプメンバーであり、かつターゲットをその要素として含み得るような、上位の抽象的スキーマ(上位カテゴリー)を創造して、話者の意味を理解すること、b)どのレベルのメタファーにおいても、ソースは言語化され、スキーマにあたるものは言語化されないこと、の2点である。

相違点は、a)対象レベルのメタファー発話では、ソースとターゲットの両者が発話中に言語化されるのに対して、命題及びストーリーレベルのメタファー発話で言語化されるのはソースだけであること、b)対象レベルのメタファー発話は、アドホック概念形成によって表意レベルで解釈されると考えることができるが、命題レベルとストーリーレベルのメタファー発話は推意レベルで解釈されると考えざるをえないことの2点である。

- (i) My job is a jail.(私の仕事は刑務所だ)
(下記図の網掛けは語彙化されていることを示す)



- (ii) A: What kind of mood did you find the boss in?
(上司の機嫌はどうだった?)
B: The lion roared.(ライオンが吠えていたよ。)

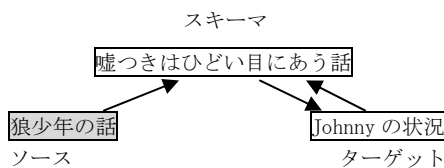


- (iii)[最近 Johnny が嘘をつくことが母親は気になっていた。ある日、Johnny の弟のおやつ(チョコレート)がなくなっていることに気付く。チョコが大好きな Johnny が食べた可能性が高いと思い、母が尋ねた状態で]

Johnny: It's not me that ate the whole chocolate.
(チョコ食べたの僕じゃないよ。)

Mother: Let me tell you a story, Johnny. Once upon a time, A Shepherd Boy, tending his flock not far from a village, liked to amuse himself by crying out "Wolf! Wolf!" His trick succeeded two or three times; the whole village came running to his assistance, only to be laughed at for falling for his ruse. Then, one day, the Wolf came for real. The boy cried out in earnest, but his neighbors, thinking he was at his old sport, ignored his cries, and the Wolf devoured the sheep.(こんな話があるのよ、ジョニー。「村の近くで家畜の番をしている羊飼いの少年が、ふざけて「狼だ! 狼だ!」と叫んだ。助けようと集まってきた村人たちを、その少年は嘘に引っかかったと嘲って楽しむようなことが2、3度あった。ある日、狼が本当にやってきた。その少年は、今度は真剣に助けを求めて叫んだが、村人は、また例の遊びをしているのかと思い、彼の叫びを無視した。そして狼は羊を貪り食ってしまった。」という話です。)

Johnny: Sorry, I've been mistaken. It's me that ate the whole chocolate. (ごめん、間違ってた。チョコを食べたのは僕です。)



- (2) 現時点で最も包括的なコミュニケーション理論(発話解釈理論)と見なせる「関連性理論」は、アドホック概念形成(発話構成要素

の語彙概念は、緩められたり強められたりして発話のコンテクストにあう概念にその場で調整される語用論のプロセス)によって語彙概念の抽象化を扱えるので、(1i)のような対象レベルのメタファー発話の解釈過程を説明することはできるが、ストーリーレベルの類似性に基づくメタファー発話の解釈(推意導出)過程を説明することができない。それは、関連性理論が、語彙概念より大きな単位(例えばストーリー)の抽象化を扱う道具を持っていないことに起因することを明らかにした。

(3) ストーリーレベルの類似性に基づくメタファー発話解釈では、ストーリー全体を抽象化する(帰納的)推論が主要な役割を果たし、その方向性と程度を制限する働きを関連性の原則が担っていることを示した。(近刊)

推論において、真の前提が真の結論を完全に保証するのが演繹的推論であり、結論の真が、真の前提によって必ずしも論理的に保証されない推論が帰納的推論である。

ストーリーレベルのメタファー発話においてどのような推論が働いているのかわかるために、(1iii)の Johnny が母親の発話をどのように解釈するかをたどってみる。チョコレートのこととまったく関係のない羊飼いの話を始めた母親は、きっと何か関係のあることを言おうとしているのだろうと思いながらもその関連性がわからないまま、Johnny は字義通り羊飼いの少年の話を理解していくと考えられる。話が終わってその話を理解するだけでは、母親の発話の関連性が達成できないので、さらに推論を働かせ、狼少年の話は「嘘つきの少年が、誰も信用してくれなくなって、ひどい目にあった」話であり、「嘘をついていると周りの人に信用されなくなって、結局自分がひどい目にあうので、嘘についてはいけない」と母親は言いたいのだと理解する。

「狼少年の話」を聞いて(前提として)「嘘つきはひどい目にあう話」だと解釈する(帰結する)プロセスは、(1i, ii)と同様抽象化であり、その推論は前提の真から帰結の真が保証されない帰納的推論である。

ただしこの抽象化は無制限に行われるものではない。「抽象化とは非常に操作的な言い方をすれば、具体事例の持つ特徴をひとつ以上取り去ったものであり(鈴木 1996:96)、高度な抽象化をすることは多くの処理労力を必要とする。狼少年の例において抽象化によって作られる上位スキーマは、(1i, ii)と同様、ターゲットを要素として含みうる程度に最小の労力で創造されたものである。つまり、ストーリーレベルのメタファー発話解釈に伴われる抽象化には、関連性の原則によって制約を課された帰納的推論規則が主要な役

割を果たしているということである。

(4) Sperber and Wilson(1995)は、発話の推意は、演繹推論にかかわる前提推意と帰結推意のどちらかであると主張するが、それ以外に、帰納的推論規則によって引き出され、関連性の原則によってその生成が制限されるもう一つ別のタイプの推意が存在することを明らかにした。(近刊)

発話によって伝達される意味には、明示の意味と非明示の意味の2種類がある。関連性理論は前者を表意、後者を推意と呼び、表意は、発話の論理形式を拡充発展させたもので、推意は、発話によって伝達される意味のうち表意以外の意味であると規定される。そして、下記(i)のような会話において、ピーターは、ジェーンの本が自叙伝であることを知らなくても、マリーはジェーンの本を読まない、ことを伝達していると理解する。その際のマリーの発話の解釈プロセス(ii)は、確かに Sperber and Wilson の言うように演繹規則の削除規則を用いた推論である。このとき、(iib)が前提推意、(iic)を帰結推意である。

(i) Peter: Have you read Jane's book?

(ジェーンの本読んだ?)

Mary: I don't read any autobiographies.

(私、自叙伝は読まないの。)

(ii)a. Mary doesn't read any auto biographies. (発話)

b. Jane's book is an autobiography. (前提推意)

c. Mary doesn't read Jane's book. (帰結推意)

この規定の基づくと、先の(iiii)の狼少年の話をした母親の発話によって伝達される意味 a)「嘘をついていると周りの人に信用されなくなって、結局自分がひどい目にあう」ので b)「嘘をついてはいけない」は、どちらも、発話の論理形式を拡充発展させたものではない、つまり表意ではないので、推意であると見なさなければならない。しかし、(3)で示したように、a)は演繹規則によって引き出される推意ではなく、帰納的推論によって「狼少年の話」を「Johnny のチョコの話」を要素に含みうる程度に抽象化したものである。つまり、(liii)のストーリーレベルのメタファー発話の例は、Sperber and Wilson (1995)の推意タイプに関する主張「推意は前提推意か帰結推意のどちらかである」が間違っていることを示していることになる。

(5) 抽象化(帰納的推論)による推意を関連性理論に組み入れ整合性を保つことによって、中央系に関する発話解釈モデルの修正発展に貢献した。

関連性理論において、オンライン解釈プロセスにおいて働く推論規則は、演繹規則の削除規則のみであると仮定されている。その根

拠は、下記(i)のような帰納規則や(ii)のような導入規則が動くと中央系の計算機構オンラインプロセスが止まらなくなるからである。

(i)前提 a. 吉本バナナの『キッチン』は面白い。

b. 吉本バナナの『TUGUMI』は面白い。

帰結 c. 吉本バナナの小説は面白い。

(ii)前提 a. 太郎は哲学者である。

帰結 b. 太郎は哲学者であるか言語学者である。

確かに、帰納推論規則や演繹推論の導入規則は何も制約を課さずにオンラインプロセスに載せると止まらなくなると予測される。しかし、認知効果と処理労力によって定義される関連性を鍵概念とし、「人間の認知は、関連性の最大化と連動するように働く傾向がある」という関連性の認知原則と「すべての意図明示的伝達行為は、それ自体の最適な関連性の見込みを伝達する」という関連性の伝達原則の2つの原則を例外のない普遍原則と位置づけ、それに基づいて「最小労力の道筋」を辿る解釈モジュールを仮定する関連性理論において、上記メタファー発話解釈プロセスの「ソースをプロトタイプ要素とし、ターゲットをも要素として含みうる方向への最小労力の抽象化」という制約付の帰納推論を組み入れることは可能であることを論じた。ここでも「最小労力の道筋を辿る」プロセスであることが必須の(前提)条件になる。

(6) Glucksberg (2001) *Understanding Figurative Language* は、A is A タイプのメタファーにおけるカテゴリー化分析の有効性を示しているが、考察対象範囲が極めて狭く、本研究が対象とする様々な類似性に基づくメタファーの統一的説明を与えるものではないことを示した。

(7) Tendahl (2009) *A Hybrid Theory of Metaphor* の当研究最終年末出版が、本研究の研究報告提出を1年延期した直接の原因であった。従来のメタファー研究の2大陣営は、認知言語学と認知語用論であり、それぞれ独自の視点から大きな成果を挙げてきている。しかし、認知言語学的アプローチは、コミュニケーションにおける発話解釈プロセス(推論プロセス)を扱うことが出来ず、認知語用論の関連性理論は写像と抽象化を扱うことが出来ない。どちらもメタファーという現象の全体像を捉えることが出来ないのである。上記(1)~(5)に示した本メタファー研究は、ソースとターゲットの写像、スキーマ抽出といった認知言語学的ツールと、認知効果と処理労力に基づく関連性の概念を用いた認知語用論的発話解釈プロセスを融合した、まさに Hybrid Theory of Metaphor と見なすべきものである。そのため、上記 Tendahl(2009)の出版は衝撃であつ

たわけだが、詳細に検討した結果、Tendahl(2009)は、関連性理論の考え方の重要性を認識しその知見を取り込もうとしているが、本質的には Fauconnier(2002)の Blending Theory を発展させたものであり、やはり発話解釈プロセスに必須の推論を扱うことが出来ないため、本研究と競合するものではないことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

- ① 吉村あき子, 「否定と語用論」『否定と言語理論』(開拓社, 東京), 2010, pp. 332-356.
- ② 吉村あき子, 「日本語のメタ言語否定と「ワケデハナイ」」『人間文化研究科年報』(奈良女子大学大学院人間文化研究科), 査読有, 第 25 号, 2010, pp. 1-13.
- ③ 吉村あき子, 「メタ言語否定とノデハナイ」, 『日本エドワード・サピア協会 研究年報』(日本エドワード・サピア協会学会誌), 査読有, 第 23 号, 2009, pp. 25-37.
- ④ 吉村あき子, 「否定の語用論研究をめぐる境界問題」, 『奈良女子大学文学部研究教育年報』(奈良女子大学文学部), 査読無, 第 5 号, 2009, pp 57-69.
- ⑤ 吉村あき子, 「ことばが面白いと思ったのは...」『リレーエッセイ ことばと言語学を考える』言語学出版社フォーラム HP([http:// www.gengosf.com](http://www.gengosf.com)), 査読無, 2009.
- ⑥ 吉村あき子, 「人とコミュニケーション能力」, 『「E-夢 はっしん!」』奈良県教育委員会メールマガジン巻頭言, 査読無, 2008, p.1.
- ⑦ 吉村あき子, 書評空間: ロビン・カーston 著, 内田聖二・西山祐司・武内道子・山崎英一・松井智子訳『思考と発話 - 明示的伝達の語用論』研究社, 東京 (原著: Robyn Carston (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell, Oxford) 月刊『言語』(大修館書店, 東京, 学術雑誌), 査読無, Vol.37 No.7, 2008, p. 119.
- ⑧ 吉村あき子, 「メタファー発話の類似性レベルと解釈過程」, 『阪大英文学会叢書 4 ことばと視点』(英宝社, 東京), 査読有, 2007, pp. 149-169.

[学会発表] (計 9 件)

- ① 吉村あき子, 「日英語の文否定」日本英文学会第 8 2 回大会[招待発表], (於神戸大学), (2010. 5. 30)
- ② 吉村あき子, “Objection and Attributiveness,” KRG 談話会(第 3 回なら

山ことばの会)(於奈良女子大学), 研究発表, (2010. 3. 9)

- ③ YOSHIMURA Akiko, “On Horn’s Metalinguistic Negation,” The 12th Annual Meeting of Pragmatic Society of Japan (held at Ryukoku University) Workshop 2 “Aspects of Negation: Neo-Gricean, Relevance-Theoretic and Cognitive Linguistic perspectives” Oral Presentation . (2009. 12. 5)
- ④ YOSHIMURA Akiko, “Descriptive/Metalinguistic Dichotomy?: A New Taxonomy of Negation,” The Annual Meeting 2009, Linguistics Association of Great Britain (LAGB) 2009, (at University of Edinburgh, Scotland), Oral Presentation, (2009. 9.8).
- ⑤ 吉村あき子, 「記述否定とメタ言語否定?—新しいタクソノミーを求めて—」特別講演(於金沢大学人間社会環境研究科), (2009. 7. 7).
- ⑥ 吉村あき子, 「再考: メタファー発話の類似性レベルと解釈過程」第 1 回メタファー研究会 (於関西大学大阪サテライトキャンパス), 研究発表, (2009. 5. 9)
- ⑦ 吉村あき子, 「ノデハナイとワケデハナイ —日本語のメタ言語否定をめぐる—」日本エドワード・サピア協会 第 23 回研究発表会 (於活水女子大学), 研究発表, (2008. 10. 18).
- ⑧ 吉村あき子, 「否定の語用論的研究」, KRG 談話会(第 1 回なら山ことばの会)(奈良女子大学), 研究発表, (2008. 3. 1).
- ⑨ 吉村あき子, 「否定の語用論」, 日本言語学会第 135 回大会 (於信州大学), 公開シンポジウム『否定と言語理論』, 研究発表, (2007. 11. 25)

[図書] (計 2 件)

- ① 吉村あき子, 『否定と言語理論』(共編著), pp.1-477, 開拓社, 東京 (2010. 6.18)
- ② 吉村あき子, 『言語の領域 II』(中島平三監修、今井邦彦編集), 第 3 章語用論 (pp.25-51) 担当, 朝倉書店, 東京, (2009. 4. 20).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉村 あき子 (YOSHIMURA AKIKO)
奈良女子大学・文学部・教授
研究者番号: 40252556